

沖縄での研究会と世界

京都大学工学研究科合成・生物化学専攻 浜地 格

とある領域の日米セミナーに参加するために西海岸サンタバーバラにやって来た後に訪れた Caltech での Department Seminar が終わって、ちょっとほっとした気分で書いているため、散文的になることをご容赦願いたい。この領域は 50 代中盤から後半の方々の活躍もあり、日米交互の発表を少し門外漢として客観的に聞いていても、発表内容はアメリカに負けていないし、むしろ優れていると感じて、日本勢やるな、と嬉しい気分になった。しかし、それは、Caltech で吹っ飛んだ。現役のノーベル化学賞受賞者が複数いるのだし、来る前から分かっていたけれども、Organic/Chemical Biology 領域の faculty がやってくれた Informal seminar/discussion は、どれも素晴らしく、かつ挑戦的である。私のセミナーには 94 歳になるらしい John Roberts (G. Whitesides の先生、Dynamic NMR や benzyne 研究の巨匠) 名誉教授もやって来て、質問もしてくれる。その下に、年齢的にも成熟期の大御所が複数いて、若手や中堅どころが、大御所の背中を見ながら必死でその姿勢を受け継ごうとしているように感じられる。またさらに印象的だったのは、Department Seminar が終わって全体質問のあとにも、Mac を片付けている自分のところ

へ大学院生がやって来て、色んな質問や研究提案をしてきたことであった。90代から20代までこの層の厚さはなんだろう。どの世代にも、その目の前に世界標準の手本がいるわけだ。私自身の position はせいぜい中堅どころであろうが、世界第一線と戦い挑戦する姿勢を持ち続けられているだろうか、我が身を振り返って思ってしまった。我々の先達が必死で世界を追ったように、そして日本のプレゼンスを獲得したようなレベルで。その姿勢なしにはこの国の研究レベルは維持できないし、次の世代に何も伝えられないのではないか。

2012年はまた、生命化学研究会が主催し、深瀬会長を中心に運営された第二回アジア Chemical Biology 会議（ACBC2014）が沖縄で開催された年でもあった。2年後のシンガポール開催も決まったし、2nd ACBC が大成功であったことは疑いの余地はないが、私が率直に感じたことは、韓国やシンガポールの研究・発表レベルの高さに対する驚きであった。これに main China が加わると想像すると……。沖縄は、この研究会にとって発足当時の印象的な集まりを提供してくれた場所であり、この研究会の中心メンバーが若さにまかせて夢を語った場所である。あの頃からすると全員の status が大きく変わり、色々な責任が背中に乗っかっている。しかしそれだからこそ、もう一度初心に帰って、瑞々しい気持ちと夢と野心をこめて、（決してアメリカと同じスタンスでなくて良いので）挑戦的でオリジナルな研究に取り組まないと……。2つの全く異なる国際会議のことを振り返りながら、沖縄とは反対側から太平洋を眺めた。

2012年生命化学研究会ニューズレター巻頭言より